

大石遺跡 (第4次)

山の神遺跡 (第2次)

平成13年度範囲確認調査報告書

2002.3

長野県原村教育委員会



表紙地図10,000分の1 ○印が大石・山の神遺跡

序

このたび平成13年度に発掘調査を実施した大石遺跡・山の神遺跡の報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は、菖蒲沢地区に広がる山林の開発計画にもとづき、遺跡内容の把握と範囲の確定のために実施したものであります。

大石遺跡は、昭和50年度に中央自動車道建設に先立って行われた発掘調査で、縄文時代中期の大きな集落跡が発見されたことで著名な遺跡であります。また山の神遺跡は大石遺跡の東に隣接する遺跡として、その関連が注目されておりました。

今回の調査では、両遺跡の範囲を明確にするとともに、山の神遺跡の様相がはっきりしてきました。

村内には100を超える遺跡がありますが、発掘調査に携わるたびに、失われる貴重な文化遺産を大切にするとともに、後世に伝えて行く責任を強く感じるものであります。開発の流れの中でいかなる形で遺跡を保護していくか、最も妥当な方法を検討しているところであります。

発掘調査にあたり県教育委員会のご指導、多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表す次第であります。

また、発掘調査報告書刊行に至る過程において、お世話をいただいた関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

例 言

1. 本報告は長野県諏訪郡原村菖蒲沢に所在する大石遺跡（第4次）・山の神遺跡（第2次）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は原村教育委員会が、平成13年6月1日から18日にかけて実施した。整理作業は、平成14年1月4日から3月29日まで行った。
3. 現場の発掘作業における遺構等の実測と記録は、田中正治郎・小林りえが行い、写真撮影は田中が行った。
4. 遺物・図面の整理は小林が行った。
5. 執筆は田中が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には大石遺跡に49、山の神遺跡に50の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、ご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚くお礼申し上げる次第である。

目 次

序	例	言	目	次
I	発掘調査に至る経過		3
II	発掘調査の経過		3
III	遺跡の位置と環境		5
IV	調査方法		6
V	遺構と遺物		6
VI	まとめ		10
	引用参考文献		調査組織	報告書抄録

I 発掘調査に至る経過

平成12年、株式会社スワリク（諏訪市豊田）より、長野県諏訪郡原村菖蒲沢地区の山林を開発し、大規模な駐車場（トラクターミナル）を造成する計画が村に示された。該当地域は菖蒲沢川と矢の口川に挟まれた尾根で、西は大石遺跡、東は山の神遺跡が周知の遺跡として分布している。

大石遺跡は昭和50年度に行われた中央自動車道、原パーキングエリア（下り線）建設に先立つ発掘調査で、大規模な縄文時代中期の環状集落跡が発見され、縄文時代の集落跡をほぼ完全に調査した例として全国的にも著名な遺跡である。また、山の神遺跡は大石遺跡の東に接する大規模な遺跡であり、昭和54年度に行われた確認調査では、わずかな面積から6軒の住居址が発見された。原村では最大ともいえる遺跡であり、大石遺跡とは時期を異にしている点などから、集落の移動が想定され、縄文時代の集落を考慮するうえでも大変重要な遺跡である。

このため、この地域は、現状のまま保存していくのが最も好ましいが、「開発やむなき」との結論に至れば、当然記録保存のための発掘調査が必要になる。しかし、該当地域は山林で表面採集はできない状況にあり、遺跡の範囲および性格等については不明瞭な点が多く、それらを明確にするための確認調査を平成13年6月1日から18日に実施した。

II 発掘調査の経過

平成13年6月1日 発掘準備を行う。

4日 発掘機材の搬入、テントの設営を行う。

5日 数m間隔で試掘穴を任意に設定し、試掘を始める。縄文時代中期中葉の炉址、時期不明の集石を大石遺跡で確認する。縄文時代前期～中期土器・石器が大石・山の神双方の遺跡から出土する。

6日 試掘を続ける。ヤマネの棲息を確認する。

8日 試掘はほぼ終了する。

11日 試掘穴の位置実測を始める。

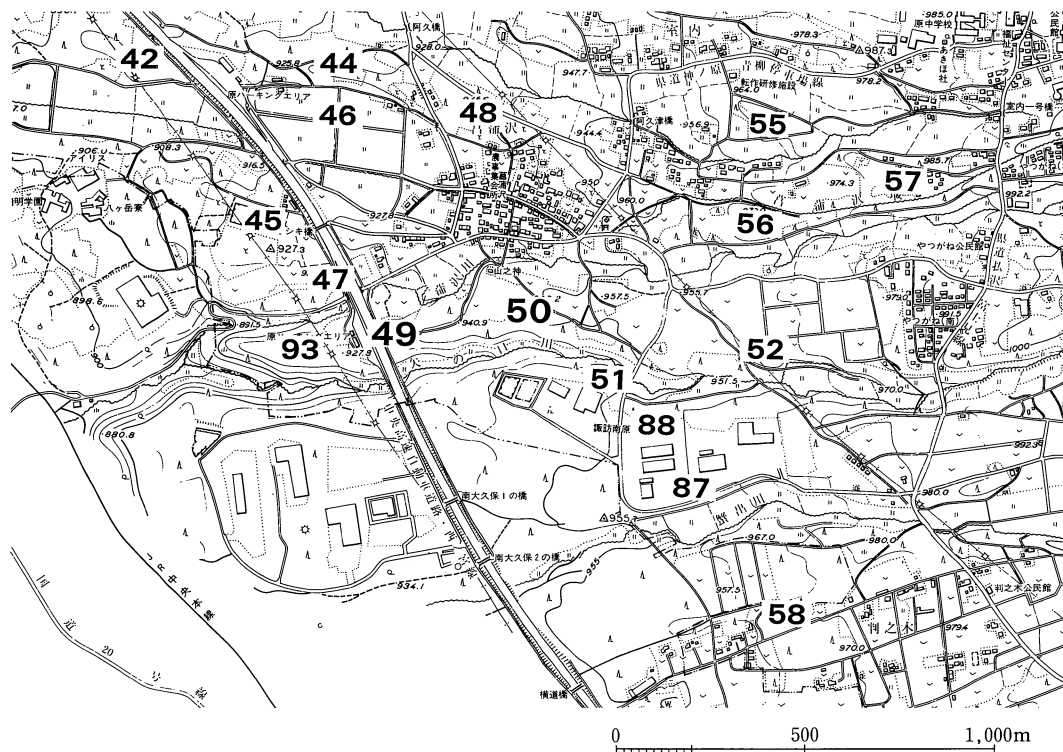
13日 試掘穴の位置実測はほぼ終了する。

18日 試掘穴を埋め戻し、テント等の撤収を行い、調査を終了する。

表1 大石・山の神遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
42	居沢尾根	○		○	○	◎	○				◎			昭和50・51・52・56・平成6・11・12・13年度発掘調査
44	原山						◎				○			昭和50年一部破壊
45	広原日向	○				○	○				○			昭和58年度発掘調査
46	宿尻	○	○			◎	○				◎			平成5・6年度発掘調査 消滅
47	ヲシキ		○	○		○					◎			昭和51・平成10・11年度発掘調査
48	榆の木						◎				○			昭和53年一部破壊
49	大石	○	○	◎	◎						◎	○		昭和50・平成9・10・13年度発掘調査
50	山の神						◎				○			昭和54・平成13年度発掘調査
51	姥ヶ原						◎							昭和63・平成元年度発掘調査
52	水掛平						○				○			平成7・8年度発掘調査
55	中尾根			○	◎	○					◎		○	平成6年度発掘調査
56	家前尾根				◎	◎					◎			昭和51年一部破壊、平成6年度発掘調査
57	久保地尾根						◎							昭和51・平成11年一部破壊、昭和25・平成6・7・8・13年度発掘調査
58	判之木					○					○			
87	下原山南		○			◎					○			昭和63・平成元年度発掘調査
88	下原山北		○			◎	○				○			昭和63・平成元年度発掘調査
93	大石西			○	○						○			平成2年度遺跡確認調査



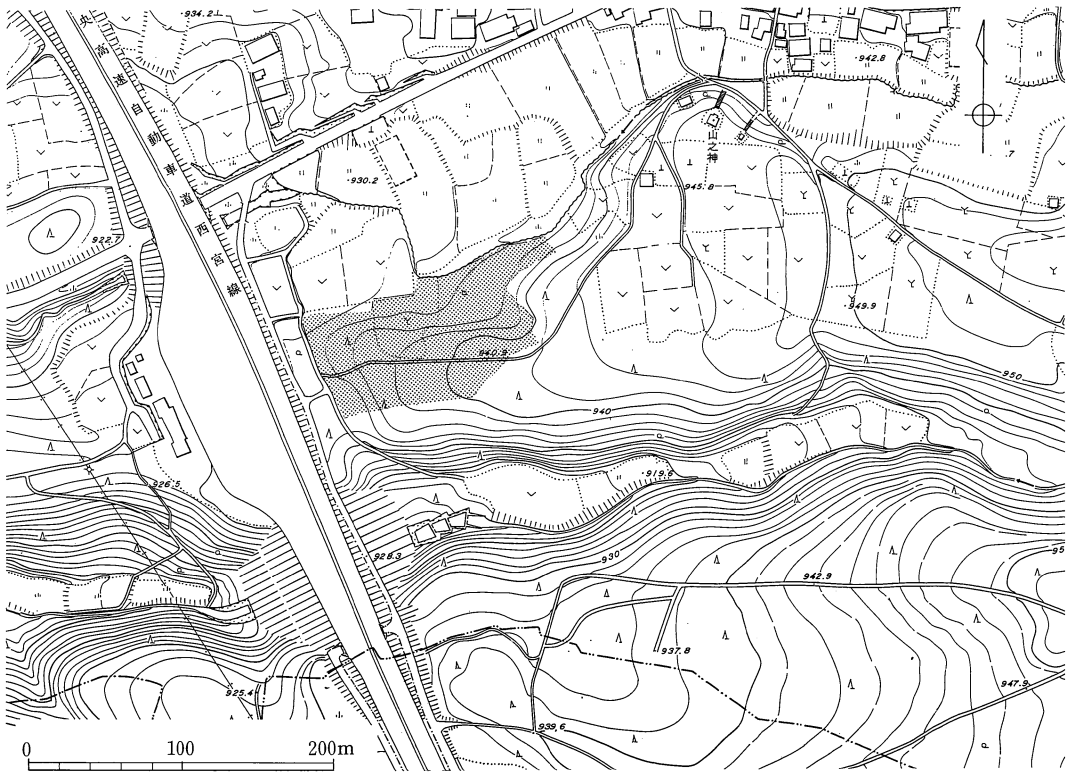
第1図 大石・山の神遺跡と付近の遺跡 (1:20,000)

III 遺跡の位置と環境

調査の対象となった2遺跡は、長野県諏訪郡原村菖蒲沢区に位置している。この付近は八ヶ岳の西麓のほぼ中央にあたり、東西に細長くのびた大小の尾根が発達している。それらの尾根上から斜面にかけては第1図に示したように縄文時代を中心とした数多くの遺跡が展開しているが、本遺跡もその一つ、菖蒲沢川と矢の口沢川に挟まれた尾根に立地している。

東側の台地状に尾根が広がった部分については山の神遺跡（原村遺跡番号50）、西側のやや狭い尾根については大石遺跡（原村遺跡番号49）として周知されていた。地目は山林であり、標高は935m前後である。

この2遺跡は「発掘調査に至る経過」で触れたように、大規模な遺跡であるが、山林であるため、その範囲や遺構の密度等は不明な点が多い。大石遺跡はその中核がすでに記録保存されており、今回の調査対象地区はわずかな面積となるが、山の神遺跡については未知の部分がほとんどであった。



第2図 大石・山の神遺跡 発掘調査区域図・地形図（1：5,000）

IV 調査の方法

対象面積が約11,000㎡と広いことから、数mの間隔で任意の試掘穴をあけ、遺構・遺物の有無を確認する方法をとった。山林内のため、立ち木の状況や村道避ける等で試掘穴の密度は一定でないが、遺物の散布状況を知るべく、空白地点が生じないように心がけた。また、試掘穴は一辺数10cmの方形とし、基本的にローム層の上面まで掘り下げた。遺構に当たった場合はその時点で掘り下げを中止し、破壊を避けた。谷底部ではローム層が深く侵食されているため、水成堆積の礫層の上面までを調査対象とした。

試掘穴の総数は168で、第3図に示したとおりである。そのうちの78の穴から遺物が得られ、2つの遺構が検出された。

V 遺構と遺物

遺 構

大石遺跡で炉址（写真2）、および図示できなかつたが集石を1基づつ検出した。炉址は当地方の縄文時代中期の一般的なサイズで、方形に近い石囲炉である。集石は拳大程度の円礫からなり、赤色化していたことから集石炉の可能性もある。双方とも地表から数10cmの深さに埋没していた。

山の神遺跡では、遺構にともなうと思われる遺物の集中は見られたものの、明確な遺構は発見できなかった。

遺 物

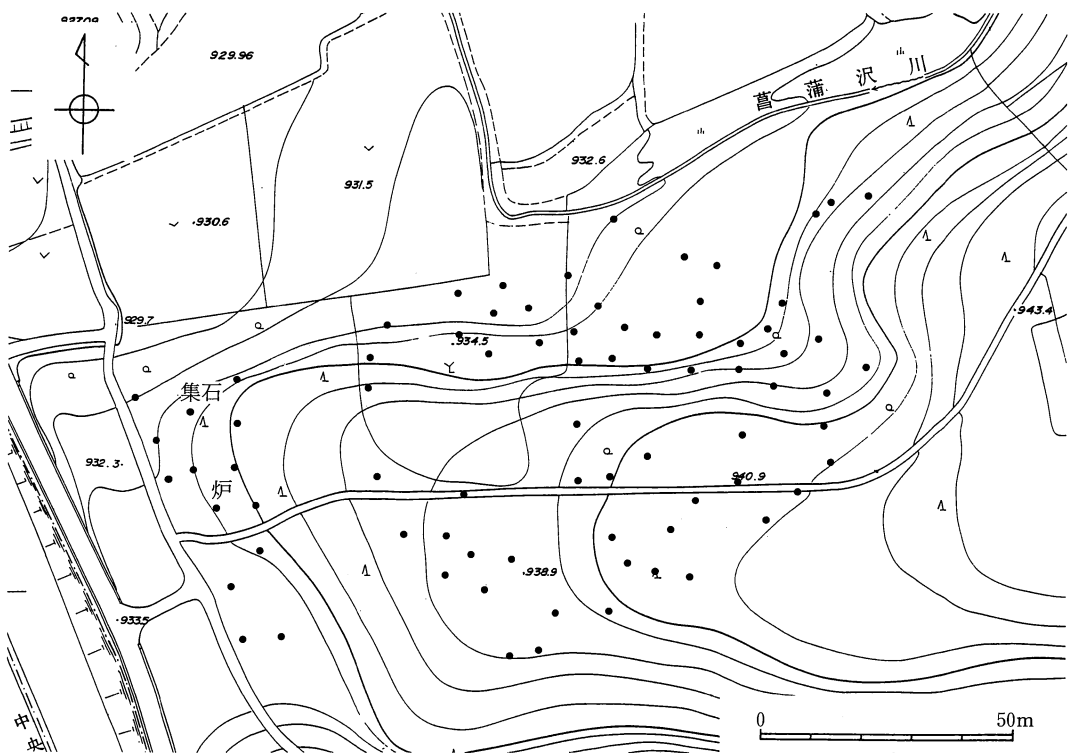
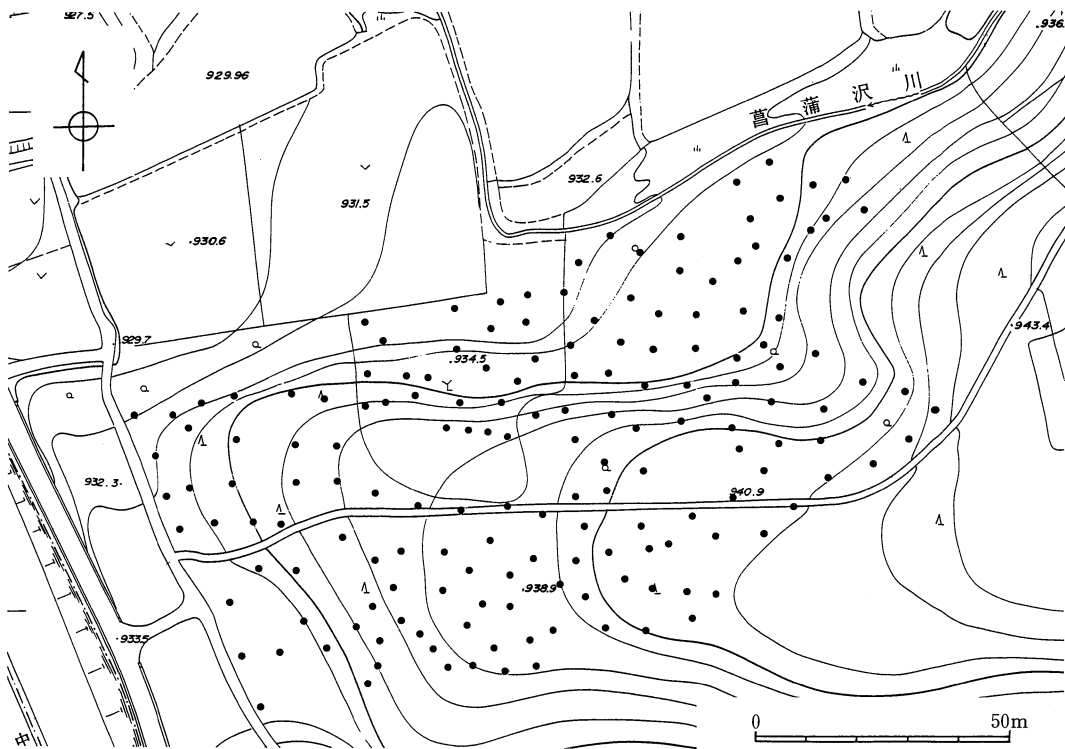
試掘穴の半数近くから土器・石器を発見している。特に偏った分布は示していないが、西側の大石遺跡の分布範囲と、東の山の神遺跡の中間にかなり明確な空白部分がみられることから、この部分を双方の遺跡の境界と考えて良さそうである。

また、遺物は尾根上のみならず菖蒲沢川沿いの斜面や谷底部からも少なからず得られており、当然これらは尾根上からもたらされたと考えられるため、以前から予想されていた通り、かなりの規模の集落跡が埋没していることが裏づけられた。

土 器（第4、5図）

縄文時代前期末葉から後期に至る土器破片が、ほぼ間断なく出土している。時期的には中期中葉の新道式ころの土器が多いように思う。若干の説明を加えてみたい。

1～3は前期末葉の土器で、図示してないが、胎土・焼成とも在地の土器とは異なる関西系の土器片も出土している。4・5は中期初頭の九兵衛尾根式、6～19は中期中葉で、8・9は平出



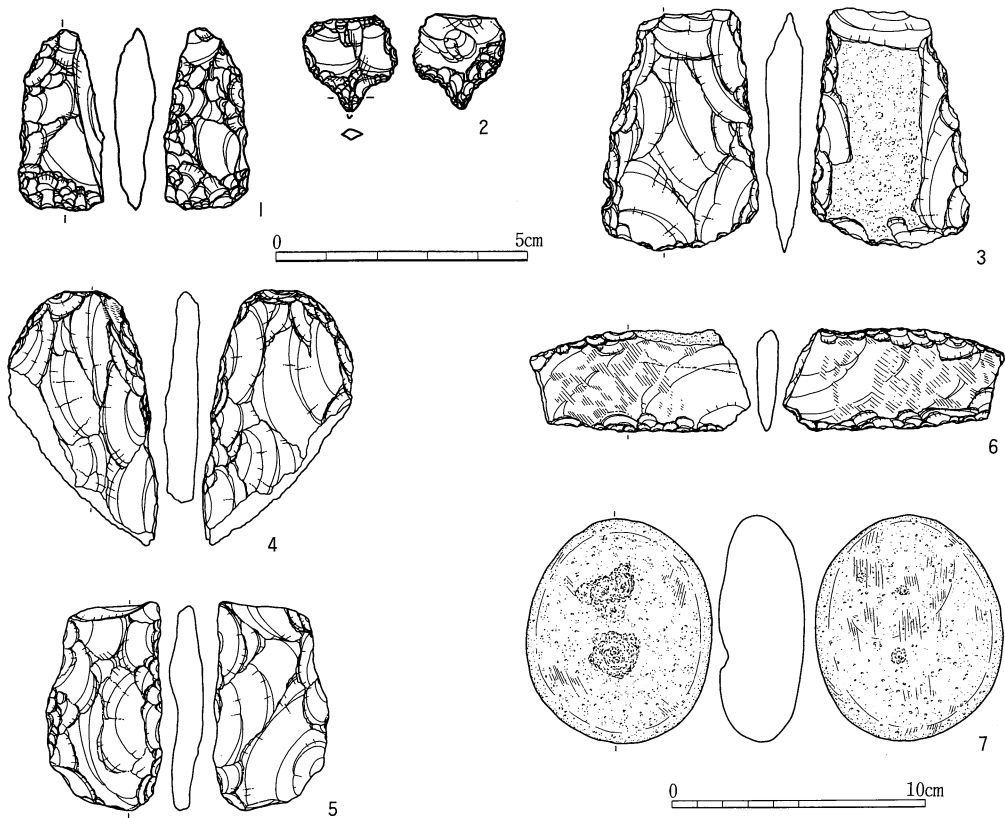
第3図 大石・山の神遺跡 上=試掘穴位置、下=遺物出土試掘穴位置



第4図 大石・山の神遺跡 出土土器拓影(1)



第5図 大石・山の神遺跡 出土土器拓影(2) (1:2)



第6図 大石・山の神遺跡 出土石器 (1~2=1:1.5、3~7=1:3)

第Ⅲ類A系統の土器である。11~19は新道式から井戸尻式にわたる。今回の調査ではこの時期の土器が最も多い。20・21は中期後葉の曾利Ⅱ式、23は中期末葉から後期初頭に位置づけられよう。22は無文の薄手の土器であるが、さらに新しい時期のものと思われる。

石 器 (第6図)

土器に比べて出土した石器類は多くなく、そのほとんどが剥片、あるいは破損品であった。図示できたものには石錐、打製石斧、横刃形石器、凹石等がある。

1は黒曜石製の不定形石器、2の石錐は黒曜石製で先端部を小さく作り出しているが、摩耗痕跡ははっきりしない。3~5は打製石斧、6は横刃形石器、7の凹石は形態・石材とも当地方に一般的なものである。

VI ま と め

調査の結果、遺構・遺物は西の大石遺跡と東の山の神遺跡にかなり明確に分離して検出され、従来の遺跡範囲がほぼ正しいものであることが確認された。

大石遺跡からは土器・石器のほか石囲炉、集石が検出され、中央自動車道建設に伴って調査された縄文時代の集落跡の一部が埋蔵されていることが判明した。

山の神遺跡からは尾根上の広範な地点から土器・石器が出土し、大規模な集落跡が埋没していることが容易に推察されるが、一般的には集落跡が分布しない谷底部からかなりの遺物が採集された。これらの遺物は流れ込んだものと思われ、今回の調査地点の東側に続く尾根の存在とともに、縄文時代集落跡がより広い範囲に存在することを示唆していると言えよう。

この地域の開発に当たっては当然ながらしっかりした発掘調査が前提になることはいうまでもない。また、余談であるが調査中に亜高山性の動物であるヤマネの棲息が確認された。周知のとおりヤマネは冬眠する特殊な哺乳動物として特別天然記念物に指定されているが、標高1000mに満たない今回の調査地点にも分布していたことは興味深い。今後の開発にあたってはこれについても十分な留意が必要となろう。

調 査 組 織

平成13年度 大石・山の神遺跡発掘調査団名簿

事務局 原村教育委員会

教 育 長 大館 宏 (～平成13年7月22日)

津金 喜勝 (平成13年7月23日～)

学校教育課長 小林 銹晃

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美

調 査 団 団 長 大館 宏 (原村教育委員会教育長 ～平成13年7月22日)

津金 喜勝 (原村教育委員会教育長 平成13年7月23日～)

調査担当者 田中正治郎 平出 一治

調 査 員 平林とし美

調査参加者 発掘作業 稲垣 桂子 久根 種則 小池 英男

小池 美秋 小島久美子 小島 政雄

小林 智子 小林 りえ 小松 弘

五味計佐雄 篠原 治郎 清水 正進

新村 力 高橋 儀男 田中 耕平

田中 進 田中 初一 西沢 寛人

福田 幸宗 藤原 正春 宮坂今朝寿

渡部 静香

整理作業 小林 智子 小林 りえ 坂本ちづる

渡部 静香

大石・山の神遺跡



写真1 発掘調査区(北から)



写真2 石罏 検出状況

報告書抄録

ふりがな	おおいしいせき・やまのかみいせき							
書名	大石遺跡(第4次)・山の神遺跡(第2次)							
副書名	平成13年度範囲確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	62							
編著者名	田中正治郎							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 Tel 0266-79-7930							
発行年月日	西暦 2002年03月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おお 大石	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらしょうぶざわ 原村 菖蒲沢	3637	49	35度	138度	20010604		平成13年度範囲確認 調査
				57分	12分	20010618		
やま 山の神	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらしょうぶざわ 原村 菖蒲沢	3637	50	35度	138度	20010604		
				57分	12分	20010618		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大石	集落跡	縄文時代	中期 竪穴住居址 集石	1軒 1基	縄文時代 前期・中期土器破片 石器		調査の性格上、住居 址と集石は確認にと どめた。遺跡外縁部 の一端を明確にでき たといえよう。	
山の神	包蔵地	縄文時代			縄文時代 中期・後期土器破片 石器		遺跡外縁の一端を明 確にできたといえよ う。	

